
ゲーディアの栄光

ノート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーディアの栄光

【Nコード】

N6418W

【作者名】

ノート

【あらすじ】

お金も無ければ記憶も無い。全てを失った主人公に残されたのは変な服と剣の腕だけだった。成り上がりファンタジー。

息を吸う。

それが、とても懐かしい。

俺はゆっくりと体を起こした。それから、静かに目を開ける。大きな部屋だ。茶色い壁には細かな絵が刻まれている。いや、壁だけではなく、絵は床と天井にも刻まれていた。

立ちあがると着ている服が擦れ、小さな音を立てた。白いトーガだ。1枚の大きな布を体に複雑に巻き付けている。身につけているのはこの服だけだ。俺は慌てた。剣が、ない。

もう一度、部屋を見渡した。壁に備え付けられた松明のお陰で一定の明るさは保たれているが、窓もないため室内は暗い。少なくとも、探し物をするには適切ではない明るさだった。しばらく周囲を見回したが、この部屋には何もない。本当に何ひとつないのだ。俺は剣を探すことを諦め、部屋の外へ出ようと扉へと向かった。

「あれ？」

扉には鍵がかかっていた。扉には絵が刻まれていない。木製だ。しかも新しさを感じさせる。俺はしばらく考えたが、この扉には大した価値もないだろうと結論づけた。

「ちよつと失礼」

押し倒すように足で蹴ると扉は大きな音を立てて倒れた。

倒れた扉を踏んで外へと出る。明るい。窓から差す光が石造りの廊下に満ちている。松明の光とは比べ物にならなかった。

「あ……」

喉に何かを詰まらせたような声。音源の方向には二人の女の子がいた。二人とも目を見開いている。二人とも青と白が入り乱れた同じ服を着ていた。あんな服、見たことがない。俺は彼女たちに話しかけようと一歩踏み出す。すると右側の背の低い女の子が更に目を大きくして――

悲鳴。

耳をつんざくような声だった。左側の女の子もその声に驚いたらしく、連鎖するように悲鳴を上げた。当然俺もその声に驚いて、小さな悲鳴が口から漏れた。悲鳴に重なるように足音が聞こえる。

「どうしたのですか!」

二人組の女の子の後ろから、更にもう一人女の子が飛び出てくる。二人組の女の子より幼い。15歳くらいだろうか。ブロンドの髪を2つに結っていた。手に剣を握り、鎧らしきものを着ている。だが、俺はそんな鎧見たことなかった。

彼女と目が合う。嫌な予感がした。

予想通り、武装した女の子は問答無用で剣を振り上げる。俺はそれを避け、足払いをかけた。

「あっ!」

態勢を崩す女の子。俺は右手で彼女の剣を奪い、左手で彼女の背を強く押した。鎧が派手な音を立てて女の子が転倒する。

二人組の女の子が更に悲鳴をあげる。この子たちの肺活量はどうなっているんだ。その悲鳴に釣られたように、鎧を着た男たちが廊下を両側からやってくる。少なくとも10人はいるようだった。

「俺、怪しい者じゃないですよ!」

男たちに包囲され、弁解を始める。だが、手には女の子から奪った剣があり、その子は床に倒れている。

「お前は何者だ!」

男たちの中から一人が前に出てきて俺に問いかける。かなりの長身だ。体格も良い。年齢は50歳くらいだろうか。

「何者だって言われても……」

俺は返答に困った。返答に困ったという事実困った。とりあえず名前だけ告げる。

「アオイといいます」

「どこの国の間者だ?」

「間者じゃないですって!」

首をぶんぶん振って否定する。こいつは無能なのだろうか。そんなこと、俺を捕らえてから聞けば良い。仮に間者だとしたら答える訳がないだろう。だが、男の目が俺を見ていないことに気付いて、彼の目的が別のところにあるのだと分かった。

倒れていた女の子がそのままの体勢で俺めがけて足を蹴りあげる。避けようと思ったが、間に合わなかった。右の太ももをブーツで強打されて俺の態勢が崩れる。

「ヴェーテ！ 離れろ！」

男たちが剣を構え、突撃してくる。ヴェーテと呼ばれた少女はさっと立ちあがり離脱する。まずい。俺は痛めた右足をなるべく使わないように、左足に重心をかけて剣を構えた。

先陣を切って突撃してきた男が剣を斜め上から振るう。俺は彼が剣を振り落とす前に、剣の柄で顔をぶん殴った。彼はそのまま崩れる。

二人目は隙の小さい突きで俺の首を狙っているようだった。その切っ先が首に届く前に剣を蹴りあげる。同時に後ろから斬りかかってきた三人目の顔を肘で打つ。剣を失い、拳を振ってきた二人目を蹴り飛ばす。後ろにいた男たちを巻き込むように転倒する。後何人だ？

「私がやる」

先ほど俺に何者か問いかけた男が躍り出る。その動きは若々しく、年齢を感じさせない。白く染まりはじめた髪を揺らして、男が一歩踏み出す。

男は俺に飛びかかりながらも、剣を構える様子はなかった。全身が隙だらけに見える。だが、不思議と攻撃することは躊躇われた。俺は男から距離を取る。男はそれを見て剣を下段に構えた。綺麗な構えだ。俺はそれを受けに入る姿勢を取る。来い。

俺は男の斬撃を受け止めるつもりだった。男が目の前に迫る。だが、剣はまだ振られない。まだか？ そう思う間にも男との距離が縮まる。男が背を向けるように体を翻した。そこで、ようやく男に

剣を振るつもりがないことに気付く。

「うあっ！」

男の体当たりをモロに受けて吹き飛ぶ。石畳の上を滑り、着いたトーガの一部が破れた。

「抑えろ！」

男たちが俺の体を抑えつけて勝利の雄叫びを上げる。その下で俺は諦めて全身の力を抜いた。

俺が尋問から解放されたのは8時間ほど経ってからだった。最初は優しく色々質問されたが、俺が「知らない」の一点張りを貫くと、最終的に自白剤を飲まれた。それで、俺が本当に何も「知らない」のだと分かると、彼らは急速に俺から興味を失った。俺は、自分のアオイという名前以外知らなかった。

独房の中で俺は色々と喋りたい気持ちを必死に押さえていた。自白剤の効果がまだ残っているらしい。自白剤は南方の貴重な花から作られるらしい。尋問者たちに自白剤がいかに関心するかわからず、何も自白すると、彼らはうんざりした顔をしていた。彼らがいかに関心するかわからず、うんざりしていたかについても語りたいが、今はやめておこう。

ひんやりとした石の床が気持ちいい。この気持ちよさを味わえない奴らは不幸だ。しばらくはこの独房にいても良いかもしれない。それに、俺には行く当てなどないのだ。変な部屋で起きて、そこから出たら女の子が悲鳴を上げて、不審者の俺を兵士たちが捕まえた。それだけしか俺の記憶は存在しない。

それから、恐らくだがここは城のようだった。かなりの広さを誇っている。城が広いなどの知識はあるため、俺がなくしたのは記憶だけのだろう。戦いの知識もあった。体もそれを覚えている。

カツカツと歩く音が聞こえ、顔を上げる。誰かが近づいてきている。どうするべきか。少し悩んだが、俺は誰かと話したい欲求を抑えきれなかった。格子に近づく。

しばらくしてやってきたのはブロンドの髪を2つに結った女の子だ。俺に襲いかかってきた女の子。鎧はつけていない。だが、身につけている服はやはり見たことがないものだった。

「どうしたんだ？」

笑顔で話しかける俺を見て、少女は眉間に皺を寄せた。

「様子を見に来ました」

「そうか。暇だったんだよ。話し相手になってくれ」

「その着ている原始的な服は何なんですか？」

少女は俺の声を無視して問いかける。いや、話し相手になってくれているのだろうか。どちらでも良い。

「トーガだよ。お前の着ている変な服こそ何なんですか？」

「変な……」

少女の目が鋭くなった。少女は次の質問をする。

「どうしてあそこにいたんですか？」

「あそこってどこですか？ あ部屋か？ あ廊下か？ それともこの城みたいなのところ？」

「あの廊下のこと」

「変な壁画だらけの部屋から出ただけさ。そうそう、あの何もない壁画の部屋は何なんだ？ あ松明は何のために誰が点けてるんだ？ 油の無駄だろ」

「あ……、そういえば自白剤を飲んだんですね。やけに饒舌だと思えば……」

「そうそう、あれ美味しいんだよ。甘くて。お前も飲んだら？」

「キリが無いですね。また明日来ます。その頃には薬も抜けていますから」

そう言う少女は踵を返し去っていった。

「おーい！」

呼びかけるが無視される。俺も薬でハイになっている奴と話したいとは思わないが、あんまりじゃないか。俺の意思で飲んだんじゃないぞ。ちくしょう。

することもなくなった俺は簡単な運動をすることにした。体を動かさないと落ち着かない。

それにしても、俺はどうなるのだろうか。特に何もしていないし、すぐに解放されるだろう。あの女の子がまた来るらしいし、明日もここにいるのは確実なのだろうけれど。

翌朝、起きると同時に俺は憂鬱な気分に襲われた。独房で起きるといふのは気分が良いものじゃない。薬も抜けたらしい。今の俺は自分を客観視出来ていた。

「これはまずいだろう……」

俺はお城らしき場所では捕まっている。つまり、権力者の手の中だ。間者だと思わしい奴を簡単に見逃すだろうか？

それに、昨日来た少女にかなり失礼な態度を取ってしまった。一般人がこんな場所に入れる訳がない。少なくとも、兵士か何かだ。年齢的にありえないが、何らかの地位についていた場合は困ったことになる。

小さな窓にも格子がはめられている。かなり頑丈そうだ。

打つ手無しか。俺が厚さを測ろうと壁を叩いたりしていると、足音が聞こえてきた。俺は壁を叩くのをやめて大人しく待つ。しばらくすると、昨日の少女が再びやってきた。

「変な音がしていましたが、何をしてたのです？」

「何もしてませんよ」

俺は手を広げてアピールした。壁を叩いてたのがばれたらしい。

「薬は抜けたようですね」

「そうみたいです」

「私はヴェーテと申します。あなたは？」

「アオイです」

昨日みたいに余計なことを話すつもりはなかった。聞かれたことにだけ答える。

「アオイは記憶がないと聞きました。本当ですか？」

少女は俺より年下のはずだが、かなりしっかりとしている。俺は自分の年齢を知らないが、少なくとも彼女よりは上のはずだ。

「本当です。何も覚えていません」

「あの戦い方はどなたの元で学んだのです？」

「分かりません」

「かなり妙な動きでした。それに手加減していましたね。致命傷になるような攻撃をしていない」

「妙って言われても……」

「あなたにも師がいるはずですよ。ですが、国内にあのような戦い方をするものはいません。やはりあなたは国外から来たのでしょうか？」
話が嫌な方向に向かい始めた。俺は焦る。

「待った！　俺は本当に何も知らないんだって！　大体お前が知らないだけで、こういう戦い方をする奴が国内にもいるかもしれないだろ！」

「それはありません」

「どうして！」

「あなたは私よりも強い。それより強い者が国内にいて無名な訳がありません」

大した自信だ。だが、このままだと俺が間者扱いされてしまう。

ヴェーテは俺にずいっと顔を近づけた。

「あなたは何者なんですか？」

答えられない。

「どこから来たんですか？」

「変な壁画だらけの部屋だよ……」

苦し紛れに答える。

「その前にはどこに？」

「分からないって。そうだ。俺が出ようとしたらあの部屋鍵がかかってたんだよ。あの部屋、中から鍵はかけられなかった。つまり、誰かが俺を閉じこめたんだ！」

「誰があなたを閉じこめるんです？」

「それは……」

ヴェーテは呆れたようにため息をついた。

「このままではアオイを解放出来ませんよ」

「だって、記憶がないんだ。どうしようもないだろう」

「あなたの服」

「え？」

「あなたのその服は何なんです？」

「トーガのことか？」

「見たことがあります。かなり原始的ですよ。どこかの民族衣装だ
と思うのですが違いますか？」

衣服に関する知識は残っている。確かに一部の国や周辺国でしか
着ていないと思うが、民族衣装かと言われると違う気もする。

「別に伝統的でも何でも無い服だ」

「目立ちますね。普通の服を用意させましょうか？」

普通の服。俺は彼女の着ている服を見た。白と茶色の見たことが
ない変な服だ。変な飾りのようなものがついている。

「いや、良い。これは俺の服だ。手がかりになるかもしれない」

「そうですか。どこの国の服なのかは分かりますか？」

俺は知っている。だが、答えることで状況が悪化したりしないだ
ろうか？ 悩んだが、結局口にする。

「イエールシェイル周辺だよ」

「イエールシェイル？」

ヴェーテは首を傾げた。年相応の可愛らしさを感じる仕草だった。
「知っているのか？」

「ええ……でも、いや何でもありません。あなたはイエールシェイ
ルの人間なのですか？」

「分からない。ただ、この服がイエールシェイル周辺で着られてい
ることだけ知ってるんだ」

「なるほど。色々分かりました。それでは私はこれで失礼します」

そう言うとヴェーテは去っていった。イエールシェイル。その言
葉で何かを掴んだのかもしれない。イエールシェイルは大陸で最大
の国だ。人口も多い。そして、ここはイエールシェイルから遠い場

所だろうと推測できた。彼女はトীগを変な服を評価した。恐らくトীগを着たイエールシェイル人に会ったことがないのだ。それから、彼女の言葉の訛りがイエールシェイルのそれとは違った。奇妙なアクセントと、聞きなれない表現。

ここはどこなのだろう？　せめて、それを尋ねるべきだった。後悔する。少し慎重になりすぎていた。

それから、俺は自分がイエールシェイル人である可能性について考えた。少なくとも、その周辺の生まれだろう。ヴェーテに尋ねられるまで、何故俺がトীগを着ているかについて考えもしなかったが、少なくともトীগを着用する地域で生活していたに違いない。

少しだけ気が楽になった。自分が何者なのか分からないのは非常に不安だ。その日はまずい飯を食べ、寝て、食べ、寝ての独房生活を楽しんだ。

「出て良いぞ」

独房生活3日目、兵士の男が俺にそう告げた。

「え、本当に？」

「ああ」

兵士は憐れみと軽蔑が混ざったような表情を浮かべていた。

いそいそと立ちあがり、俺は檻の中から出た。先を歩く兵士についていく。

「この国の名前って分かります？」

昨日ヴェーテに聞きそびれたことを聞いてみる。

「プロシアだ」

短い返答。聞いたことがない国だ。山間の小さな国か何かだろう。この男はあまり会話が好きな人種ではないらしい。黙々と歩き続ける。やがて、建物の外に出た。きよろきよろ周囲を見回すと少し遠くにお城が見える。かなり立派だ。イエールシェイルのものより大きいかもしれない。そう考えてから、イエールシェイルの城を見たことがあるのだと気づいた。

「じゃあな」

男はそう言って背を向ける。え？ 本当にもう自由なのか？ 驚く俺の前から男は姿を消した。

俺は知らない土地の中、呆然と立ち尽くした。持ち物は着用しているトーガだけ。お金もない。そんな中で得た自由は、あまりにも重い。

そもそも何故俺は釈放されたのだろう。イエールシェイルの人間らしいと身元が分かったからか？ それさえも分からない。

しばらく考えた末、俺はイエールシェイルへと行くことにした。そこへ行けば、俺を知っている誰かと会えるかもしれない。近くを通った男に声をかける。

「すみません。イエールシェイルって国へ行きたいのですが、ここからどのくらい遠いでしょうか？」

「イエールシェイル？」

男はぼかんとしていた。

「こんな変な服を着ている国です。知りませんか？」

自分の服を変な服と称するのに抵抗はあったが、彼らに言わせるとそうらしいので合わせる。

「見たことない服だなあ。その国も聞いたことがないよ」

「そうですか。ありがとうございます」

やはり、このプロシアとイエールシェイルは離れた場所にあるのだろうか。それとも、今の男が無学だったただけだろうか。自分の国の名前以外知らない人間も珍しくない。

だが、ヴェーテは知っていたようだった。もう一度あの子と話したいが、それは少し難しい。

俺は途方にくれた。とりあえずお金だ。お金さえあればこの国でも生活出来る。住み込みで働けるところを探そう。重い足取りで、俺は仕事探しを始めた。

ひと月の間、小さな料亭で俺は働いた。かなり安い賃金だったが、住み込みで働けるのが魅力的だった。余り物の食事を貰えることもある。仕事も簡単だ。

それから、誰もイエールシェイルを知らないらしいと分かった。俺もプロシアなんて国は知らなかったし、プロシアからイエールシェイルはかなり遠いのだろう。

初めて貰った給料を手に、俺は町を歩いていた。料亭の主人からは給料でこの国の服を買うように勧められたが、俺にそのつもりはない。この服は俺が俺である証拠のように思えたのだ。

小さな鍛冶屋の前で足を止める。鉄の匂いと、金属音が周囲を包

んでいた。俺は迷わずに入って、声をあげた。

「すみませーん。剣を作って頂きたいのですが」

大柄な男が面倒そうにやってくる。本当に面倒そうだ。

「剣を作る？ お前さん用にか？」

「そうです」

「変なことを言うもんだな。うちは商店にしか売ってないんだが」

「商店に？」

「俺が作ったのを商店に買い取ってもらって、商店がそれを売るんだよ」

そんな制度初めて聞いた。

「じゃあ作ってもらえないんですか？」

男はちらつと隅に目を向ける。

「そこに作ったものが置いてある。直接売ってやっても良い」

とりあえず頷く。剣が手に入るなら何でも良い。

並べられた剣を手取る。一番しっくりするものを選んだ。

「銘は何というんですか？」

「そんなもんねえよ。変なこと言う奴だな」

俺は肩をすくめた。この国の文化はよく分からない。

「これを買います」

「300オクスだ」

俺は金の入った袋を取り出し、男に渡す。

「300オクス分取ってください」

男は呆れた顔をした。

「無防備な奴だな」

「この国の貨幣の数え方はよく分からないので」

男は数えながら袋から数枚の銀貨を取り出した。

「300オクス受け取ったぞ。カモられないように気をつけろよ」

「はい」

この男が受け取ったのが本当に300オクスなのか俺には分からない。だが、信用するしかなかった。

軽くなったお金の入った袋と剣を片手に俺は鍛冶屋を出た。妙な安心感がある。剣がないことがずっと不安だったのだ。思えば、最初に目覚めた時も剣がないことに不安を覚えた。

料亭に戻ると、主人は俺が手にした剣を見て怪訝な顔をした。

「物騒なものを手にしてるな」

「ないと不安だったんです」

「そんなもん持ってもしょうがないと思うが……まあ、金の使い方は人それぞれだ」

「傭兵か何かでもやってたのかい？」

客の一人がそう尋ねてきた。中年の男だ。

「そんなところです」

記憶がないなんて言っても白けるだけだろう。茶を濁したが、客は俺に興味があるようだった。

「腕に自信はあるのか？」

「それなりに」

「それなりか！」

笑い出す客。何が面白いのか分からなかったが、俺も愛想笑いを浮かべた。料亭の主人も曖昧な表情をしている。

「実はな、明日リュセミアまで荷を運ぶんだが護衛がいらないんだよ。もちろん護衛なんていらぬほど安全な道なんだが、護衛をつけないと万が一ということもあるだろう？」

「はあ」

何となく話が見えてきた。

「それで兄ちゃんが暇なら頼みたいんだよ。本職で護衛やってる荒っぽい奴らとはあんまり関わりたくないんでね」

「別に俺は良いですが……」

ちらりと主人へ目を向ける。主人は頭をかきながら肩をすくめた。

「仕方ない。その間の給料は出さないからな」

「なーに、俺が主人の倍払うさ」

それに客が笑顔で答える。それで、行くことが決まった。

陽光が照らしつける中、俺は馬に跨またがっていた。前に行くのは五台の荷馬車。その更に先には軽鎧を纏った少女が馬を歩ませている。商隊はこれで全てだ。

どうやら、依頼者は本気で商隊を守る気はないらしい。襲われるはずがないと思っっているのだ。俺はちらりと先頭の少女を見た。腕は細い。必要な筋肉があるようには見えない。この国の治安がどの程度なのか分からないが、依頼者は護衛に荒っぽい連中をつけるぐらいなら、役立たずの形式的な護衛をつけた方がマシだと思っているように感じる。そして、俺もその役立たずの形式的な護衛として選ばれたのだろう。

それはそうとお尻が痛い。腰を浮かせて座る位置をずらす、あんまり効果はなかった。ちくしょう、馬ってこんなに乗り心地が悪いのか。

お尻をさすっていると、先頭にいた少女がいつの間にか俺の隣に並んでいた。心配そうな顔をしている。

「馬に慣れてないの？」

「あんまり慣れてない」

馬には乗れるが、慣れてはいらないらしい。自分に関するエピソードはごっそり抜けているので全て憶測だ。

「よく仕事受けたね。それと、その服何なの？」

彼女は俺の白いトーガを指差した。少しむっとする。

「トーガだ。俺の故郷の服だよ」

「そんな動きづらそうな服で平気？」

「俺にとっては動きやすいんだ」

手を振ってアピールするが、馬上なのでことなく慎重な動きになっちゃった。少女は半信半疑な目をしている。

「別にそれで動けるなら良いけど……」

「そういうお前こそ動けるのか。そんな細腕で」

「それが、こんな細腕でも動けるの」

彼女はニヤッと笑い、腰から剣を抜いた。レイピアだ。すらりとした細い刀身が陽の光に輝く。

「レイピアか」

「突き主体ならそれほど筋力はいらないもの」
「なるほど」

俺は改めて彼女を見た。長い茶色の髪に大きな緑の瞳。背丈は俺より頭半分ほど小さい。可愛らしい顔立ちだったが、立ち振る舞いのせいかどこか勝気な印象を受けた。だが、その勝気な性格は深い内部まで浸透していないように感じさせる。そして、俺はこの子の名前を知らない。

「まだ簡単な挨拶しかしてなかったな。俺はアオイだ」

「ミリアよ。よろしくね」

ミリアはそう言って手を差し出した。その手を取って、少女の手が豆だらけであることによりやく俺は気付いたのだった。

「今日はここまでだな」

商隊がその歩みを止めたのは陽が赤みを帯び始めてからだだった。早朝の出発から大体10時間弱経ったぐらいだろう。近くには林があり、風はそれで遮られる。他の荷馬車の姿も見受けられた。

「ちょっと良いかい」

依頼者の男が俺に笑顔で話しかけてきた。口元の皺が強調される。

「俺達はあるちで飯を作るから、荷物と馬の番を頼むよ」

「はい」

横でぶるつと馬が震える。

「飯が出来たら持ってくるから楽しみにな」

そう言って依頼者は手を振りながら背を向ける。今まで考えもしなかったが、彼らが寝ている間も俺は夜の番をすることになるだろう。ミリアと交互に寝るとしても、俺の睡眠時間は半分だ。朝と昼

は長時間馬に乗らなくてはいけない。かなりハードだ。

「リュセミアだっけ。目的までどれぐらいなんだ？」

「20リーグぐらいよ。3日あれば着くわ」

6時に寝て6時に起きるとすると実質的な睡眠時間は6時間ぐらいか。3日ぐらいなら平気だ。

「あなた、リュセミアまでの距離も知らずに仕事を受けたの？」

「護衛の仕事は今回が初めてなんだ」

呆れたようなミリアに俺は弁解するように答える。すると、ミリアは頭を抱えた。

「護衛の前は何をしてたの？」

「料亭で働いてた」

ミリアの表情がどんどん絶望的になっていく。

「料亭の前は？」

「特に何もしてない」

記憶がない、というのは口にしづらかった。同情されて気まずい雰囲気になるのが目に見えていたからだ。

「じゃあ……剣はまともに使えない？」

「いや、師匠に色々教えてもらった」

勢いで勝手に師匠をでっちあげてしまった。

「へえ、師匠の名前は？」

「ヘルヴェッセ」

勝手に口から言葉が出る。俺にはヘルヴェッセという師匠がいたことになってしまった。誰だそれ。

「ヘルヴェッセ？ 神様の名前じゃない。そんな大げさな名前つける人いるんだ」

そうなのか。知らなかった。

「ミリアは信仰深かったりする？」

「まさか。そんな田舎者に見える？」

このプロシアではそれほど宗教が盛んではないらしい。

「いや、そんな意味で言ったんじゃない」

「冗談よ。私、田舎者だしね」

しばらくすると、野菜とわずかばかりの肉が入った皿を依頼者が持ってきた。それなりの量だ。

「しっかり食って仕事頑張ってくれよ」

そう言うのと依頼者は火の元に戻っていった。もう寝るらしい。陽は山にその姿を落とそうとしている。

遠くから小さな遠吠えが聞こえた。狼だろうか。少し不安になるが、火があるので獣は近寄ってこないはずだ。

横を見ればミリアが布を敷いて寝る準備をしている。

「2時間交代で良い？」

ミリアは布の皺を取りながら、そう言った。

「2時間交代？」

「2時間ずつ交互に夜の番をするの。片方はその間に寝る」

「分かった。俺が先に番をするよ」

ミリアは頷いて身を倒したが、何かを思い出したように俺の方へ顔を向けた。

「……襲わないでね？」

「襲う訳ないだろ！」

ミリアは笑いながら顔を背けた。からかわれたらしい。

俺もごろんと横になった。周囲に気配はないし、それほど治安が悪い訳でもないらしい。そこまで敏感にならなくても良いだろう。

空に散りばめられた星が目に入る。知っている星座を自然と目で追う。尾が特徴的な赤さそり座。ふたつの耳が存在を主張する白うさぎ座。俺はこれらを知っている。だが、今までそれを知っていると認識していなかった。知っていることを知っている。それが通常の状態だが、自身が星座は知っていることを知らなかった。星座の知識を呼び出すための経験をしていなかったからだ。知識はと経験は違う。知識は経験に付随して生まれるものだ。俺が喪失したのは経験であって、知識ではない。俺は俺が経験してきたことを、多分忘れてしまったのだ。

知識は経験よりも客観的なものだ。俺が俺である必要性はない。あの星座の名前は誰でも知っている。逆に経験は主観的だ。どのようにしてあの星座を名前を知ったのか。俺が俺であることによって得たのだ。

俺は着ている白いトーガを握りしめた。この服は俺の経験の一部を経験している。長い布を巻いただけで、プロシアの人間はこれを原始的だと評価した。だが、俺にとっての唯一の手掛かりで、過去の俺と今の俺を繋ぐ唯一の形あるものだった。

ミリアが横で小さな寝息を立てる。女性としては背が低い訳ではないが、俺と比べると少し小さい。何の打算もなく人と話したのはミリアが多分初めてだ。ヴェーテとの会話は保身と情報収集的な意味合いが強かった。料亭の主人との会話は雇用主と被雇用者としての関係だった。

俺は体を起こした。自分の身とミリアの身を守らなければならぬ。強い使命感だった。そのまま、交代の時間になるまで、俺は神経を研ぎ澄ましていた。

翌朝、俺は疲れが取れないまま馬を歩ませた。

「真面目なのね」

横でミリアが苦笑する。

「え？」

彼女の言葉の意味が良く分からなかった。

「昨晚、頑張って見張りしてたんでしょ」

「まあ、それなりに頑張ったよ」

「そんなに頑張らなくて良いのよ。どうせ何も起きないんだし」

「何か起きたら困る」

「うーん。どうして私たちが護衛に選ばれたか分かる？」

「さあ」

「夜盗に襲われたりするより、護衛してた人に荷物を盗まれることの方が多いのよ」

「え？」

それは夜盗が少なく、治安が良いという意味なのだろうか。それとも、護衛さえ当てにならないほど悪いのだろうか。

「最近の流行りなのよ。護衛として雇われて、盗みを働くのが」

「それなら護衛雇わなくても良いんじゃない？」

「護衛が一人いるだけで強盗なんか遭うリスクが大きく減るの。」

犯罪者だって危ない橋は渡りたくないみたい」

何となくこの辺の犯罪者は度胸もないらしいということが分かった。俺もそんなに神経を尖らせなくても良さそうだ。

余裕が出てくると景色も楽しめるようになってくる。遠くに見える海岸線と山々以外は平原が広がっていた。所々に林があるものの、開放感に満ちた空気だった。

俺はプロシアを小さな山間の国だと思っていた。だが、少なくとも山間の国ではないらしい。また、海に面しているのならそれほど

資源にも困らないはずだ。土地的に恵まれている。近くに巨大な国があったりしなければ、プロシアはそこその規模なのではないだろうか。

「おい兄ちゃん」

依頼者から呼びかけられる。俺は馬を彼の荷馬車の横へつけた。

「何ですか？」

「ちょっと先の様子見てきてくれないか。検問してるらしいんだよ」

「検問？」

目を凝らしてみると、確かにそれらしきものが見えた。荷馬車が何台か並んでいて、兵士らしき男が数人いる。

「検問ってよくあるんですか？」

「いや、滅多にないんだ。だから先に行ってちょっと様子を見てきてくれ。面倒なことになってなきゃ良いんだが」

通れるか通れないかを見てきてくれ、ということだろう。俺は頷いて馬を走らせた。

検問に近づくにつれ、それが意外と本格的なのだと分かった。一台一台の荷馬車をしっかり調べ上げている。時間もかなりかかりそうだった。

「何があったんですか？」

列の最後尾に並んでいた荷馬車の男に話しかける。男は眉間に皺を寄せて俺を見やった。

「都で人殺しがあっただとよ。10人以上殺されて死体はひどい有様だったらしい」

都？ 一瞬疑問に思ったが、俺がいた町が都なのだろう。城があったのだからもっと先に気付いているべきだった。

「それで不審者がいないか調べてるんですか？」

「そういうところだろう。全く、迷惑だね」

これなら調べ終わったら普通に通してもらえるだろう。俺は男に札を言い、依頼者の元へと馬を走らせた。

「なんか都で殺人があっただみたいです」

そう告げると依頼者は頷いた。

「そうか。賄賂目的の検問とかじゃないんだな」

「違うと思いますよ」

安心したような顔をする依頼者とは対照的に、ミリアは殺人と聞いて顔を曇らせた。

「殺人だけで検問なんてするかしら？」

「何でも10人以上殺されたらしい」

ミリアはますます顔を曇らせた。

「10人？　まとめて殺されたの？」

「さあ。そこまでは知らないけど」

10人まとめて殺す状況なんてあるだろうか。そもそも犯人が何人なのかも聞いていない。

「まあ、通れるなら良いさ」

依頼者の男は全く気にしていないようだった。商売の邪魔にさえならなければ良いのだろう。ミリアは何か言いたそうだったが、口をつぐんだ。

結局、待ち時間を合わせて検問で1時間ほど取られた。昨日ほどの距離を稼げないまま、陽が赤みを増し始める。

「今日はここまでだな」

依頼者がぼつりと漏らすように言う。その一言に合わせ、荷馬車がぎいっと音を立てて止まった。ミリアが華麗に馬から飛び降りるのを目にしながら、俺は痛めたお尻を庇うようにそっと馬を降りた。依頼者たちが飯の準備を始める。俺とミリアは荷物の番だ。

特に話すこともなく、無言のまま気まずい雰囲気の流れる。俺は特に気まずいとは思わなかったが、彼女が気まずいと感じているのが伝わってきてそれが気まずい。頭を必死に回転させた後、俺は無難な質問に辿りついた。

「そういえばミリアってどのぐらい護衛の仕事やってるんだ？」

「え？　今回で5回目かな」

「意外と少ないな。まだ駆け出しなのか」

「この年だといの方だつて！ まだ17歳なんだから！」
そう言われるとそうかもしれない。

「アオイは護衛の仕事初めてなんだよね。というか何歳なの？」

俺は何歳なのだろうか。それが分からないことに気付いて焦る。

「何歳に見える？」

「私よりは年上だよ。20歳ぐらいかな」

「正解だ」

20歳だということにしておいた。正確な年齢なんてどうでも良い。

「それまで大げさな名前の師匠の元で剣の修行してたの？」

「まあ、そうだな」

あまり突っ込まれるとボロが出そう。正直、嘘を積み重ねるのは辛い。

「それで、修行の後は後料亭で働いてたの？」

「……そうだ」

既にボロが出そうだった。

ミリアがじーっと俺を見ってくる。目を反らしたいが、ここで反らすと嘘をついていますというようなものだ。

「変な経歴。何のために修行してたの？」

何のため。何のために俺は剣を腕を磨いたのだろうか。それには当然理由があるはずだった。でも、俺はそれを知らない。

「まっ、別にどんな生き方しても自由だけどね」

彼女はそう言って話を打ち切った。言葉に詰まった俺に助け舟を出したのか、彼女の本心なのかはよく分からない。

しばらくすると、依頼者が飯を運んできてくれた。彼らはもう寝るらしい。それから今日も見張りは俺が最初にやることになった。

「おやすみー」

そう言って横になるミリアに頷いて、俺は背を近くの木に預ける。空にはやっぱりたくさんの星が輝いていた。見慣れた星座の名前。これらから、今の位置を特定することは出来ないだろうか？ いや、

出来ないだろう。仮にそれが出来たとしても、俺はイエールシェイルとプロシアの位置関係を知らないのだから意味がない。

牢で会話をしたヴェーテという少女。あの子ともう一度会話したいという欲求が強く湧き上がった。彼女は確実にイエールシェイルを知っているのだ。どこにあるのか、どのぐらいの距離なのかも知っているに違いない。

俺の考えは背後からの音で中断された。風がざわめいて木々が揺れる。葉がこすれる音の中に、確かな金属音の響きを感じた。鎧を着た人間が歩くような。

立ちあがり、周りに音を響かせるように剣を抜く。目を凝らしたが、暗闇の中には何も見えない。

「ミリア！」

大声を上げると、ミリアは飛び起きた。混乱したような顔だったが、既にレイピアを手に行っている。本能的な動きだろう。

「どうしたの？」

「誰かがいる。やるぞ」

はつきりと俺は告げた。この声が音源の主に届いて、去ってくれますように。

だが、それは叶いそうにもなかった。今でははつきりと鎧がこすれる音がする。もう隠れる気もないらしい。横でミリアが喉を鳴らした。音がさらに近づく。

闇の中に闇を見た。黒い鎧、黒くただれた肌。姿を見せたソレに對してミリアが目を大きく見開く。俺もソレを見て剣を取り落としそうになった。

身長はかなり高い。俺よりも頭ひとつは大きいだろう。そして、人間ではなかった。人間のような外見をしているが、その非常に醜悪な顔は人間のものではありえなかった。削げたような鼻。白い目。異常に発達した筋骨を黒い鎧が隠している。

俺はこんな生き物を知らない。背筋に冷たいものが走る。

「ミリア！ 依頼者を起こして逃げろ！」

横でミリアが怯えたような顔を向ける。

「早くしろ！」

再び怒鳴ると彼女は頷いて、駆け出した。警戒する俺にソレは笑う。

「ゲーディアよ、探したぞ」

醜悪な化け物は確かにそう言った。俺はそいつが言葉を喋ったことに驚き、内容にまで理解が及ばなかった。

化け物が剣を構え、突撃してくる。速い。その巨体からの突撃に俺は死を感じた。剣で化け物の剣を受け流すが、勢いを殺しきれずに俺は吹き飛んで地面に這いつくばった。化け物が剣を振り下ろす。体をひねりそれを避け、惨めに剣を振るう。リーチの差でそれは化け物に届かない。

「弱いな。ゲーディアとは思えぬ」

化け物は嘲笑する。

「お前、何者だ」

口から漏れた疑問は本心だったが、時間稼ぎのためでもあった。

「私はナードヴィツヒ。お前の運命をここで断ち切る者だ」

ナードヴィツヒと名乗った化け物が鎧を鳴らし、俺に肉迫する。こいつの剣は重すぎて受け切れない。そう判断した俺はそれを避け、がむしゃらに斬りつけた。ナードヴィツヒはそれを正確に受け、弾く。こいつに攻撃の隙を与えてはならない。俺は無駄だと分かりながら次々と攻撃を加える。

「その程度か」

ナードヴィツヒがつぶやいた。これではまだ足りない。もっと速く。俺は初めて本気で剣を振るっていた。最初に兵士たちと戦った時は手加減していたし、それ以外に戦いの経験を俺は持っていない。自分の限界を試すように、ただひたすら剣を振るう。頭が焼け切れそうなほど熱い。少しずつ早さを増す斬撃。だが、ナードヴィツヒはそれをいとも簡単に受ける。

まだ、足りない。もう死の恐怖はなかった。ただ、自分の限界と

ナードヴィツヒだけの存在だけが世界の全てだった。

「お前の限界はその程度ではあるまい」

ナードヴィツヒが嗤う。それで、ナードヴィツヒがこの戦いを楽しんでるのだと知った。それに応えるように俺も笑う。体を万能感が包む。疲労は感じない。

もつとだ。時間感覚が体から消える。もう俺はナードヴィツヒと互角に渡りあっていった。攻撃と防御が一体になった攻撃を共に繰り出し、そこに優劣はもはや存在しない。やがて、重い一撃がぶつかり合い、剣戟の音は止んだ。

「俺はアオイだ」

肩で息をしながら名乗る。一瞬、ナードヴィツヒは知性を感じさせる表情を浮かべた。だが、すぐにそれは醜悪な獣のものになる。

「ゲーディアのアオイだな。憶えたぞ」

ナードヴィツヒがその巨体を感じさせないほど華麗に舞う。剣が描く軌跡が綺麗だった。だが、その剣がとてつもなく重いことを俺は知っている。受けきれない。俺はそれを剣で受けることを諦めた。全力でそれを避け、慣性に任せて地面を転がる。ナードヴィツヒが次に備えて剣を構える。俺は立ち上がると、剣を片手に突撃した。剣と剣がぶつかる。俺は剣を捨てた。ナードヴィツヒの白い目が見開かれる。俺の剣に耐える姿勢をとっていた彼の態勢が崩れた。ナードヴィツヒの胸を全力で蹴りあげる。のけぞるナードヴィツヒの巨体の前に落ちた俺の剣を拾い上げ、それをナードヴィツヒの左腕の鎧の隙間へ振り落とした。

ナードヴィツヒの腕が飛ぶ。残された肩から赤い血が流れ出している。

「正当な剣ではない。だが、私の負けだ」

ナードヴィツヒが呟く。

「逃げろよ」

苦悶の表情を浮かべるナードヴィツヒに俺は告げた。どうして、そんなことを言ったのか自分でも分からなかった。

「最初、手加減してただろ。いくらでも俺を殺せたはずだ。これで貸し借り無しだ」

ナードヴィツヒは無言で背を向け、俺の前から去った。

ベッドの上でお尻を労わるように俺は寝転がっていた。

ナードヴィツヒとの戦いが終わった後、逃げ出した依頼者とミアを探すためにかなりの時間を費やした。化け物に襲われたという話は中々信じてもらえなかった。斬り落としたナードヴィツヒの腕を見せ、ようやく納得してくれた。それでも半信半疑といった形だ。依頼者は最後まで南方の褐色人種の腕だと主張していたのだ。

こんこんとドアが叩かれる。返答する間もなく、ミアが栗色の髪を揺らしてひょこっと入ってきた。

「元気ー？」

「あんまり元気じゃない」

ナードヴィツヒとの戦いの後、興奮と恐怖で眠れなかった。リュセミアまでは眠気とお尻の痛さに耐えていたが、もう動けそうになり。

「じゃあ都に戻るのは明日で良いの？」

「今日旅立つなんて言われても俺は絶対に行かないぞ……」

「ま、私は別に予定ないしリュセミアにずっと居ても良いけど」

ミアはそう言ってベッドの端にぼんと座った。

少しの沈黙。ミアが何の話をしに来たのかはもう分かっている。

「あの化け物は何だったんだ？」

だから俺から切り出した。

「さあ……。色々考えたんだけど病気的一种じゃないかな」

「病気？」

「異常に筋肉が発達してたじゃない。そういう病気があるって聞いたことがあるの」

「目が真っ白だった」

「目が白くなる病気もあるらしいよ」

ミアは少なくともそう信じたがっているようだ。

「仮に病気であんな異形になってたとして、あいつは何で俺達を襲ってきたんだ？」

「夜盗とか」

ミリアの言ってる線が一番妥当であることは俺も分かってた。同時に、納得出来ない結論でもあった。だが、口論したところで何が分かる訳でもない。

「そうか」

「うん、そうだよ。じゃあ、ゆっくり体やすませてね」

そう言っただけでミリアは出ていった。どこか足取りも軽い。その代わり、俺は小さなもやもやを胃の中に感じた。

都に戻ったのは三日後だった。

借りてた馬を返し、俺とミリアは久しぶりの喧騒の中を歩いている。リュセミアはそれほど大きな町ではなかったのだ。

「あ！ あれ食べよう！」

ミリアに腕を引っ張られ足がもつれる。昼前からミリアに都を案内してもらっていたが、ずっとこんな調子だった。

「10オクスです」

おぼちゃんがミリアに飴を2つ渡す。金を出すのは俺だ。こうやってミリアが立ちどまるたび、どんどん財布が軽くなっていく。

「よく食べるな」

「そんなに食べてないって！」

飴を舐めながらミリアは反論する。その胃袋には少なくとも5つのお菓子が既に入っているはずだ。ため息が漏れる。

「俺の給料……」

「案内してあげてる対価よ」

食べ歩いているだけで案内してもらっている気がしない。

「他に何か美味しそうなものないかな」

ミリアはもう案内する気がないことを隠すつもりもないらしかった。

た。

「くっそー……」

彼女を信用した俺が馬鹿だった。

ひとつ良いことがあったとすれば、貨幣の数え方を教えてもらったことぐらいだ。、どうして教えてもらったのかは言う必要もないだろう。

そうして従者のようにミリアの後をついていると、突然彼女が足を止めた。視線の先にはアクセサリを売っている露店。ナードヴィツヒと出会った時に感じたような恐怖が体を支配する。

「うわぁ、これ綺麗！」

ミリアが露店に駆け寄って声を上げた。店員の女性がそれにニコニコと笑顔で対応をし始めていた。

これ以上ないぐらい重い足取りでミリアの元に近づく。ミリアが持っているのは地味なのか派手なのか判断に困る色のブレスレットだった。だが、今は色よりも値札に目がいく。

「これ欲しいなぁ」

ミリアが俺にちらっと目を向ける。無視すると、彼女はちらちらと何回も振り返った。

「そんなに何回も振り返るならずっとこっち見とけよ！」

「だめ……かな……？」

お前に自分で買うという選択肢はないのか。抵抗する俺に対して店員がミリアの味方につく。

「こちら若い女性に人気なんですよ。彼氏さんもこれ素敵と思いませんか？」

彼氏でもないのに物をねだられる俺とは一体何なのか。

「彼氏さん、おねがい」

ミリアが気持ち悪いほど猫をかぶった声でそう言う。

「いつ俺がお前の彼氏になったんだよ！」

「150オクスのところですが、仲の良いお二人には特別に120オクスで売りましょう！」

「ええ！ そんなに安くなるの？」

ミリアがわざとらしく驚く。

「もう良いよ。分かったよ。買うよ……」

「お買い上げありがとうございます！」

それで、俺の財布には何も残らなくなった。

ミリアと別れた後、俺は騎士館の前にいた。ヴェーテに会うためだった。

ヴェーテという女戦士を知らないか。ミリアにそう尋ねると、彼女はヴェーテが有名な女騎士であることを教えてくれたのだ。騎士団長の娘らしい。可憐な外見とその剣の腕で知らないものはいないのだという。もちろん俺は知らなかったけど。

目の前の騎士館は無彩色の石造りで、長い歴史と威厳を感じさせた。正直、入るのが躊躇われた。一度捕まったせいで苦手意識がある。

「行くしかないか……」

門の横に立っている騎士にとりあえず話しかけよう。

「すみません。ヴェーテさんという方を探しているのですが、ここにいますか？」

騎士はきよとした顔をした。

「ヴェーテさんに？ 何の用なんだ？」

「お聞きしたいことがあるんです」

騎士は首を横に振る。

「ヴェーテさんは今は出かけてる。それにそんな理由じゃ会うのは無理だ。どうしてもって言うなら俺が個人的に伝えても良いが……」
「イエールシェイルについて教えて欲しいと伝えてもらえませんか。変な服の男がそう尋ねてきたと伝えてください」

「イエールシェイル？ 聞いたことあるような……」

騎士の男はそう言うと言と視線を空に向けた。この男が知ってるならそれにこしたことはない。俺はイエールシェイルについて知りたいだけなのだから。

「どこで聞いたんだっけなあ。学院にいた頃に聞いたと思うんだが……」

それから、騎士は俺の服に目をやった。

「それにしても変な服だ。どこで買ったんだ？」

「多分イエールシェイルって所で」

騎士はしげしげと白いトーガを眺める。それから、その目の色が変わった。この服のセンスの良さがようやく分かったのか。そう思ったが、騎士の目は服ではなくその後ろに向けられていた。

「ヴェーテさん！」

騎士が背筋を伸ばして叫ぶ。思わず、俺はその視線の先へ体を向けた。

一人の女の子が立っている。透明感のあるブロンドの髪に目を奪われる。それはツインテールに結われ、垂れ落ちた髪が風でゆらゆらと揺れていた。青い目と、青いサーコートが髪色の見事さを際立てている。

見惚れてる俺に鋭い目を向けて、ヴェーテは口を開いた。

「どうしたんですか」

「この男がヴェーテさんに聞きたいことがあるって言うんですよ！」

何故か騎士は興奮気味に叫ぶ。無理もないか。

剣を奪った時、牢獄で話した時は無我夢中で気付かなかったが、ヴェーテはかなり美しい少女だった。まだ幼さの残る顔立ちだったが、数年も経てば美女になるは明白だった。

「あなた……何故戻ってきたんですか？」

ヴェーテは俺のことを覚えていたらしい。ただ、その顔には警戒の色が浮かんでいた。

「その騎士さんが言った通り、聞きたいことがあったんだ」

「ウィルです」

騎士が名乗る。多分、俺に向けての紹介ではなく、ヴェーテへ名前を売るための行動だろう。ウィルの言葉を見捨てるようにヴェーテは小首を傾げた。

「私にに聞きたいこと？」

「イエールシェイルについて聞きたい。誰も知らないんだ。俺もプ

ロシアがどこにあるのか良く分かってない。ここからイエールシェイルまでどのぐらい距離がある？」

沈黙。ヴェーテは何かを考えているようだった。そんなに教えるのを躊躇うことなのだろうか。

ぼん、と間拔けな音。ウィルが手を合わせたらしい。その顔は喜びに満ちている。

「思い出した！ イエールシェイルって歴史の講義で聞いたんだ」
ヴェーテが頭を抑える。ウィルはヴェーテの行動を見て口を噤んだ。

「歴史の授業？ プロシアと戦争でもしたのか？」
不安になってくる。ヴェーテは諦めたように顔を上げる。

「イエールシェイルはもうないんです」
「ない？」

「イエールシェイルは既に滅びました」
ヴェーテは俺は憐れむように目を閉じた。

「え？ ちょっと待って。どういうことだ？ いつ滅んだ？」
「およそ400年前」

「はあ!？」

声が裏返る。ヴェーテはその声に驚いたらしく後ずさった。

「ちょ、ちょ、ちょ。400年前ってどういうことだよ。4年前とかじゃなく、400年前？」

「何をもってして国の滅亡とするかの解釈にもよりますが、およそ400年前で大体あっているはずですよ」

頭が真っ白になる。

「待った待った。じゃあ俺の服がそのイエールシェイルのものだってことはありえないよな？」

「そうですね。ありません」

ヴェーテは首を振った。最悪だ。俺の出身に関する唯一の手掛かりが役立たずになった。

記憶の整合性が取れなくなっていく。俺は、この服がイエールシ

エイルのものだと知っていた。いや、知っていると思っていた。プロシアの城を見た時、俺はイエールシェイルの城を見たことがあると思っていた。俺はイエールシェイルから自分が来たのだと推測していた。

ヴェーテが何故それを黙っていたのかが分かった。記憶をなくした俺の唯一の手掛かりを否定しなくなかったのだ。何故俺が釈放されたのかが分かった。俺は恐らく憐れな狂人だと思われていたのだ。「大丈夫ですか？」

ヴェーテが心配そうな顔をしている。大丈夫ではなかったが、そう答える訳にもいかない。

「大丈夫だ。そのイエールシェイルがどこにあったのかは分かるか？」

ヴェーテは下を指差す。

「ここです」

「ここ？」

「当時のイエールシェイルは覇権を争った諸侯により、3つの国に分かれました。そのうちの 하나가プロシアです。つまり、プロシア人はイエールシェイル人であるとも言えます。民族的には同じですから」

ヴェーテの言葉はもう耳に入らなかった。記憶を失う前の俺と今の俺は、全くの別物に違いない。もはや存在として連続していないのだ。役立たずの、この白い服でさえ何の手掛かりにもならない。

「いつか記憶が戻ると信じています。それではまた」

ヴェーテは思ってもいないだろう言葉を残して背を向けた。門が唸るような音を立てる。ウィルは無力な子どもを見るような、そんな表情で俺を見ながらその門を閉ざす。錠が合わさる音が響いた。

イエールシェイルに行くことはもう叶わない。自分に残った知識も信用出来なくなっていた。400年前に滅びた国へ行こうと思っ
てたなんて、どうかしてる。

目的をなくした俺は料亭の仕事をやめた。半分、自暴自棄だったのかもしれない。突然の辞職願いにも関わらず、料亭の主人は嫌な顔一つせず承諾してくれた。その顔を見て後悔が湧き上がった。だが、元々イエールシェイルに行くまでの繋ぎとして働いていたのだ。もう料亭で働く意味はなかった。

「これからどうするの？」

都の中央にある広場のベンチ。横でミリアがしかめっ面をしていた。

「護衛の仕事で食っていきこうと思ってる」

「とういか今まで何で料亭で働いてたの？」

「……住み込みで働けるからだよ」

「え？」

「俺、家がないんだよ……」

「はあ？」

「今まで黙ってたけど、記憶喪失みたいなんだ。自分がどこに住んでたのかも分からない」

口をぱくぱくさせるミリア。それから、顔が真っ赤になった。

「ばっかじゃじゃないの!？」 何でそんな大事なことを最初に言わないのよ!」

「いや、だってあれじゃん。記憶がないとか言う空気悪くなるじゃん。湿っぽいかわいそうな雰囲気になるじゃん」

「アホか!」

殴られた。地味に痛い。

「あんたね……、他に何か隠してることはないの？」

「なんか修行してたとか昔のこと話しただろ。あれは適当にその場ででっちあげた」

快音が響く。頬のあざが二つになった。本気で痛い。

「じゃあ、何で仕事やめたのよ。家ないんでしょ？」

「帰るための手掛かりみたいなものが完全になくなったんだよ。このままプロシアで生きていこうと思って仕事やめた」

「意味分かんないわよ。住み込みで働き続ければ良いじゃない」

「うーん。色々考えたんだけど、俺が俺である証拠はこの剣の腕だねなんだよ。他には何も残ってないんだ。だからっていうか、それを使って生きていきたい。料亭のおじさんは良い人だったし、そのまま働き続けるのも良いかもしれない。でも、それだと俺がアオイっていう人間である必要性は全くないんだ。記憶をなくした誰かさんで良い。俺は記憶をなくしたアオイとして生きたいんだよ」

「言ってることが良く分からないわ」

「適当に言ったからな」

3人の男が廃屋に入っていく。頬の3つのあざをさすりながら、俺はそれを眺めていた。

「入っていった。間違いないぞ」

あの後、俺はミリアに土下座し、彼女の仕事に同行させてもらった。彼女は護衛以外にも色々やってるらしく、今回は盗賊退治の仕事だった。

「確定だろう？ 行くか！」

立派なヒゲを生やしたおっさんが興奮したように立ちあがる。今回、盗賊退治にやってきた仲間の一人だ。このおっさん、どうも常に興奮していることで有名らしい。

「ゴードンさん、落ち着いてください」

ミリアがたしなめる。

「落ち着いているとも。戦いを前にすると、いつだって俺の心は穏やかな水面のように一つの揺らぎもなくなるんだ!」

駄目だこのおっさん。ゴードンはそう言いながら、武器である長柄斧を舐めまわしていた。

「まだ行かないのか?」

鈴を鳴らしたような声。生真面目な顔で女の子が尋ねる。今回のもう一人の仲間であるリセだ。

「もうちょっと待ってね」

「分かった」

こくんとリセが頷く。子犬を見ている気分だ。

「なあ、リセって何歳なんだ……?」

ずっと気になっていたことを聞いてしまった。

「12だ」

見た目通りだった。俺の腰より少し高いぐらいの身長しかない。

腰に小さなナイフをぶらさげているが、あまり頼りにならなそうだ。今回の討伐メンバーは4人。だが、リセを戦力外と考えると実質的に3人だ。

「まだか? もう良いんじゃないか?」

ゴードンが貧乏揺すりしながら急かす。ため息が漏れた。

「よし、行こう」

様子見していてもどうしようもない。俺は剣を鞘から抜き、立ちあがった。

「俺が先陣を切る。ゴードンは俺が殺し損ねた奴をやってくれ。ミリアはリセを守りながら……っておい!」

ゴードンが俺の話を無視して突っ込んでいく。意外と素早い。

「くそっ! 行くぞ!」

遅れるように俺達も駆けだした。轟音。ゴードンが扉をぶち破っていた。正々堂々にもほどがある。

「俺様登場！」

訳の分からないゴードンの叫びと、盗賊の悲鳴らしきものが聞こえる。廃屋の中には8人の盗賊がいた。その内の一人はゴードンの斧の餌食になっているところだった。

「敵だ敵だ！」

長剣を手にした盗賊三人がゴードンに襲いかかっていた。まずい。助けに向かおうとしたが、別の盗賊二人が俺の方へと走ってくる。この盗賊は意外と慎重だった。二対一にも関わらず間合いを取っている。時間が惜しい。俺はさっさと距離を詰めた。予備動作無しで剣を胸に突き立てる。もう一人が右から迫ってくるが、蹴り飛ばした。盗賊の胸に刺さっていた剣を抜き、転倒したそいつの首を刎ねる。

ゴードンは長柄斧で三人の盗賊をけん制しながら戦っていた。リーチの差で盗賊は迂闊に近づけないみたいだ。

「もう一人来るぞ！」

盗賊の一人が俺に気付いて叫ぶ。それと同時にそいつを長柄斧が直撃した。骨と肉を粉碎する音が響く。よそ見るからこうなるんだ。

俺とゴードンに挟まれた二人はそのまま剣と斧の餌食になった。入口付近ではミリアが逃げようとしていた盗賊をトドメをさしている。これで終わりだ。あっけない。

「楽勝だったな！ 一瞬で終わった！」

ゴードンは興奮覚めやらぬといった様子だった。

「今回は相手が少なかったから良かったけど、勝手に突っ込んだりしないでくれよ……」

「おう！」

威勢の良い返事だったが全く信用出来ない。

「わたし、何もしてない」

リセが無表情でつぶやいた。

「楽出来て良かったじゃない！」

ミリアが良く分からない励まし方をする。いや、多分本音なんだろう。

「わたし、役立たずじゃなかったか？」

「役立たずだったな！」

ゴードンが良い返事をする。おい。

「やっぱり役立たずだったんだ……」

うつむくりセ。黒い髪が顔を隠す。これはまずい。

「いやいや、俺はリセがいてくれて良かったよ。次も一緒に仕事したいなあ」

「本当にか？」

「ああ、本当本当」

「じゃあ、次も一緒に仕事しよう」

リセは笑顔でそう言う。この生真面目そうな子の笑顔は初めて見た。逆に俺は引きつった顔をしていた。

「次も？」

「そう、次も」

リセの赤い瞳がまっすぐに俺を見ていて、今さら撤回するのは無理だった。

「俺も一緒にやってやるよ！」

「却下だ」

便乗してきたゴードンについては丁重にお断りした。

首が、飛んだ。ごとりと音を立てて落ちるそれを見届け、剣を鞘に収める。

「こっちは終わった」

「こっちもよ」

レイピアを死体からすつと抜き、ミリアは軽くそれを振った。

「まだ私何もしてない……」

つまらなそうな声はリセのものだ。周りに転がった死体には、何の感慨も抱いていないようだった。

三日前にリセとした約束を果たすために、今日も一緒に仕事をしたのだが、リセはやっぱり不満そうだ。とはいえ、子どもに戦わせる訳にもいかない。

「私はやっぱり役立たずか？」

「いや、いてくれるだけで嬉しいよ。ほら、何だ。色々役立ってるって！」

「色々って？」

「そう言われると思うんだけど色々だよ。色々」

「やっぱり役立たずなんだ……」

「いや、役に立ってたって！」

「どういう風に？」

「ミリアー！」

俺の叫びに、死体から金品を漁っていたミリアが振り向く。すごく面倒くさそうだった。

「何？」

「リセが役立ってたってこと教えてやってくれ！」

大きなため息がミリアの口から漏れる。

「ねえ、リセちゃん。こういう場所で役に立っているのは、人を殺すことなの。それは、とても褒められたことじゃないわ。私は、

まだリセちゃんにそういうことはして欲しくない」

「私が子どもだから駄目なのか？ 大人になったら良い？」

「そうね。せめて体が大人になってからよ。今のリセちゃんの体格だと、逆にやられちゃうわ。分かった？」

「うん……」

ミリアは子どもの相手が上手いのかも知れない。しっかりと向き合っている。適当に誤魔化そうとしていた俺と大違いだ。

「よし、帰ろうか」

今いる盗賊のアジトは小さな丘のふもとにあった。都からおよそ2リーグ弱ほどの距離だ。馬で飛ばせば一時間ちよつとで帰れる。舗装された街道の上を駆けるのは気持ちが良い。天氣が良い時は尚更だ。

街道は無人だった。収穫期でもないし、仕方ないのかもしれない。吹く風だけがびゅうびゅうと鳴いていた。

適当に景色を楽しんでいると、横にミリアの馬が並ぶ。何か言いたそうだった。

「どうした？ 何か用か？」

「ねえ、前から気になってたけど、アオイって人殺すの躊躇しないよね」

「え？」

「なんか容赦ないよね。私も手加減したりなんてするつもりないけど、アオイは本当に人を殺すことに何も思っていないみたい」

「そんなことないよ。人を殺した後にはいつも最悪の気分になる。表に出さないだけだ」

確かに、俺は盗賊を殺すことに罪悪感を感じたりしない。だが、それはこちらも命を賭けているからだ。お互いが同等のものを賭け合い、それを奪い合う。そこにそれ以外の意味はない。相手が俺を見逃したのなら、俺もフェアになるように見逃してやる。丁度、ナードヴィツヒを見逃してやったように。だが、相手が全力で俺を全

力で殺そうとしているなら、俺もそれに応える。

多分、こんなことを言ってもミリアには伝わらないだろう。彼女は、俺が殺人に快楽を見出しているのではないかと危惧しているのだ。目を見れば分かる。だから、一番それを払拭するのに相応しい答えを用意した。

「うん。そうだね。変なこと言ってごめん」

ミリアが軽く謝る。

「それと、アオイすごく強いよね。私が一人相手してる間に三人くらい倒しちゃうし」

「もっと褒めてくれ」

「調子に乗るな！」

騒いでるミリアを遮るようにリセが手を上げた。遠くを指差している。

「あれ何？」

街道の先に大勢の人と馬車が止まっている。馬車の車輪が外れでもしたのだろうか。そう思ったが、すぐに違うことが分かった。金属を打ち合わせたような音がかすかに聞こえる。

「ミリア！」

「分かってる！」

馬を全力で走らせる。近づくにつれ、その様子がはっきりと分かった。黒のサーコートを着た騎士が馬車を守るように戦っている。ぱっと目で分かるほど騎士の分が悪い。騎士が五人なのに対し、襲撃者は二十人はいた。騎士が何とか持ちこたえているのは装備の陰だろう。襲撃者は鎧を着た相手とまともにやりあったことないようだった。

「ちよっとこれやばいんじゃないの？ 私あんな所に参戦する勇氣ないわよ」

金にもならないしな。命を賭けて戦う義務もない。

「ミリアはそこでリセと待っててくれ！」

だから、俺は一人で立ち向かった。剣を抜く。その音に反応する

ように、襲撃者たちがこちらに気付いた。

「何だおま——」

口を開いた襲撃者の首が飛ぶ。胴と離れた後も口はぱくぱくと動いていたが、発声器官と口はもう繋がっていない。

左右から二人が迫る。まともに相手してられるか。距離を取って、敵二人が連携出来ない位置に誘導する。それからすぐに転進。深追いしてきた敵の喉を切り裂く。声にならない悲鳴が漏れた気がした。すぐさま迫ってきたもう一人は蹴り飛ばす。転倒した相手を踏みつけて固定し、胸に剣を突き立てた。

「こいつやべえぞ！」

襲撃者たちの注意が俺に向けられるのが分かった。四人がまとめて俺に向かってくる。こういう時、剣は役に立たない。近くの死体を掴み、四人の敵めがけて投げつける。物理的な衝撃と、心理的な衝撃で敵の動きが止まるのが分かった。剣を拾い上げ、距離をつめる。剣を二回振ると、二つの首が空を舞った。今さら態勢を立て直した残りの二人が剣を振り上げる。受けるまでもない素直な動きだ。身を引いてそれを避ける。

「後ろ！」

騎士の一人が叫んだ。反射的に、体をひねる。風切り音が耳元をかすめた。ハルバードを持った男が悔しそうな顔をして俺の後ろに立っている。

「惜しかったな！」

距離を詰め、その腹に剣を刺す。剣は引き抜かない。代わりに男のハルバードを奪った。こっちの方が今の状況に向いてる。

先ほど相手していた二人にハルバードを持って突撃する。それを受け止めた敵の剣が吹き飛んだ。丸腰になった相手をハルバードで薙ぐ。

騎士の方は二人倒したようだ。俺が倒した八人と合わせると、敵の数は半分になっている。

「全滅するまでやるか？」

襲撃者たちから戦意は消えつつあった。こういう連中が望んでいるのは、簡単に勝てる戦いであって、辛勝出来る戦いや負ける戦いではない。分が悪くなればすぐに逃げ出す。

「まだやるなら、俺も手加減しないぞ」

ハルバードを見せつけるように振る。分かりやすいパフォーマンス。スってのは大事だ。

「糞！」

リーダー格らしき奴が口汚く罵る。それから、撤退していった。

どうやら俺の誠意は伝わったらしい。走って逃げる後ろ姿を眺め、俺は死体に突き刺さったままだった愛剣を引き抜いた。

「助太刀に感謝する」

戸惑ったような表情で、騎士の一人が前に出た。五十歳ほどだろうか。俺からは一定の距離を取っている。少し警戒しているようだ。

「礼には及びません。通りすがっただけですから」

「いや、素晴らしい身のこなしだった。どこから来たんだね」

露骨な探り方だ。襲撃された後だし仕方ないのかもしれない。

「都です。盗賊退治の仕事を請け負っていて、今はその帰りでした」
「ほう。通りで腕が立つ。あちらにいる女性たちは君の仲間かな？」

ミリアとリセを指差して騎士は柔和な笑顔を浮かべた。

「そうです」

「私はプロサディアン騎士団のザーベクだ。名乗りが遅れて申し訳ない」

「俺はアオイです」

どうやら警戒は解いてもらえたらしい。多分、リセを連れていたのが大きいんだろう。

「私からも感謝の言葉を述べたい」

低いしゃがれた声。馬車からもう一人男が出てきた。見た目は60歳ほどだ。まだ白い髪を残しているが、ハゲと言っても差し支えない。ハゲ一歩手前とか、そういうあだ名を子どもにつけられそうな感じがした。

「侯爵。無理をなさらない方が」

ザーベクがさりげなく俺とハゲ一歩手前の間に入る。だが、ハゲ一歩手前は首を振ってザーベクを押しつけた。

「ペナンド・クオークだ。その素晴らしい倫理と剣に感謝の言葉を」
ハゲ一歩手前改め、ペナンドは割りとしリアスな人らしい。髪にしか目がいかなかった自分がハゲしく恥ずかしい。

「いえいえ、当たり前のことをしてただけです」

「謙遜することはない。その剣の腕は本物だ。あれほどの短時間で8人を殺すなど常人には出来ぬ。それも、多勢を相手にだ」

ペナンドは目が細い。見つめられると睨まれているような気分になる。

「賊退治の帰りと聞いたか。そういったことを生業に？」

「そうですね」

「貴君の師は誰だ。騎士館への推薦状も書かず、何故そのような生き方をさせたのか問い正せねばならぬ」

「あー、師が誰なのかちよつと分からないんです。記憶を無くしちゃって」

「記憶を？」

「あ！」

突然ザーベクが声をあげた。目を大きく開きまじまじと俺を見つめている。

「その変な服、城にいた不審者か！」

ザーベクの声が響いた。記憶が巡る。俺が知る最も最初の記憶。

変な部屋で目覚め、外に出たら兵士たちに捕らえられたこと。俺を取り押さえたのは五十歳くらいの男だった。

俺もザーベクをまじまじと見返す。思い出した。こいつだ。俺を取り押さえたのは。

「不審者？」

状況を理解していないペナンドが眉を細めた。

「ええ。かなり前の話ですが城に不審者がいるところを侍女たちが発見しまして、私に取り押さえたのです。記憶が無い、気がついてらここにいたと証言していました」

何となく居心地が悪い。既に釈放されたのだから気にする必要はないのだろうか。

「無意識の内に入れるほど城の警備は甘いのか」

「まさか。ですが自白剤を飲ませた結果、記憶がないというのは本当のようでした」

「ふむん。アオイ、貴君は何も記憶がないのか」

「そうです。お城らしきところの部屋で起きた以前の記憶がありません」

ペナンドは舌なめずりした。真面目そうな細い目の奥に、いたずらっぽい光が見える。

「騎士になるつもりはないか？」

「騎士に？」

「そうだ。私が騎士館に推薦状を書く。貴君の経歴についても適当に誤魔化そう」

それを聞いたザーベクの顔が青くなった。

「侯爵、お言葉ですがそれはいけません。経歴を偽証するのは大罪です」

「偽証するのではない。省くのだ。書き忘れてしまうのだ。何度も書き忘れれば文官は面倒くさがってそのまま受理する。騎士団長には私から話を通そう」

「……侯爵は意外にもこういうことに慣れてるんですね」

ザーベクは呆れたような顔をした。

「昔は曲がったこともよくやった。最近は久しいな。それでアオイよ、もう一度聞く。騎士になるつもりはないか？」

騎士になるということは、プロシアに留まるということだ。以前ならすぐに断っただろう。だが今はイェールシェイルに行こうなんて馬鹿げたことはもう思っていない。

「アオイ、何迷ってんのよ！」

後ろから遠慮がちに話を聞いていたミリアが背中をつつく。

「騎士よ、騎士さまよ。他に何を望むの？」

騎士になったら、こうしてミリアと一緒に仕事をするかもしれないだろう。

「アオイは騎士になるのか？」

リセはこれからも危険な仕事を続けていくのだろうか。

「君には騎士としてやっていける実力がある。不安に思うことはな

い」

ザーベクが背中を押した。

「一つだけお願いがあります」

「何だ」

「この子に、リセに仕事と住む場所を提供してあげられませんか？」

リセは親に捨てられたストリートチルドレンだった。以前、家まで送ろうとした時にそれを知った。俺はそういった子たちを全員救おうと思っているわけじゃない。ただ、命をかけるような仕事を子どもがしているのが嫌だった。リセがゴミを漁って生きていたら、俺はこんなことを思わなかっただろう。だが、リセは剣を握って生きていた。実入りが良いからだろう。リセが大人なら俺は何も言わない。でも、リセは子どもだ。命を賭けて戦うことの意味について考えたこともないに違いない。それが、嫌だった。そういう人間がいると実感すると、俺は人を斬る時に躊躇してしまう。俺は人を斬る時、お互いが平等な命を賭け合っていることを前提としていた。相手も納得しているのだと。それが崩れるのが怖かった。俺のために、リセには剣を握って欲しくなかった。

「その子に仕事と住む場所を与えて、私は何を得る？」

ペナンドは面白がっているようだった。

「俺が、騎士になります。この子に仕事と住む場所を提供してもらえたら、貴方のいう通り騎士になりましょう」

「ちょ、ちよつとアオイ……。失礼過ぎるって」

驚いたような顔をしているミリアを無視して、俺はペナンドに向かいあった。

「面白いことを言う。貴君は騎士になってやっても良いという考えなのだな。騎士に推薦させて頂くという立場ではないと」

そういう考え方をしている訳ではないが、そう捉えられても仕方がない。頷きも否定もせずただペナンドの視線を受け止める。

沈黙。それからペナンドは口角をあげた。

「良かろう。その子に職と仕事を与える。そちらについても私から

推薦状を書く。それで良いか？」

「はい！」

今度は、即座に返事した。

横で寂しそうな顔をしているミリアを置いて、俺はペナンドと握手するために一歩踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418w/>

ゲーディアの栄光

2011年10月27日19時19分発行